

## 幼児の園生活におけるストレスに関する研究

堀池 美菜子<sup>1</sup>・富田 昌平<sup>2</sup>・村田 陽子<sup>3</sup>・久保 秀和<sup>4</sup>

### A Study of Young Children's Stress in Daily Preschool Life

Minako Horiike, Shouhei Tomita, Youko Murata, and Hidekazu Kubo

The purpose of this study was to develop a preschool stressor scale from the events experienced frequently by preschoolers in their daily preschool life, and to examine the relationship between preschoolers' stress levels and their self-regulation levels. In study 1, the structure of psychological stressor was investigated by means of questionnaire to 102 preschool teachers, and factor analyses revealed four factors "teacher's demand", "peer relation", "preschool ceremony", and "unsatisfaction of play", which were extracted from initial set of 14 items. In study 2, the stressor scale, of which 11 items were extracted in study 1, were administered to 46 preschoolers. Preschoolers were divided into three groups, according to the scores of the stressor scale. In addition, a preschool teacher of the children evaluated their self-regulation levels. The results showed that unsatisfaction of play and peer relation were more stressful than the other factors for preschoolers. The children, who had more stress, seemed to be less self-inhibitive than the other children. Futher research will be needed to examine stress responses and stress coping strategies in preschoolers.

**Key words;** stress, stressor, daily stressful event, preschooler, factor analyses, self-regulation

近年、成人や青年期のストレスだけでなく児童や生徒、幼児といったより若年の子どもに対してもストレスを想定し、その心身に対する影響や対処方法を探る研究が行われてきている。しかし、乳児の生理的ストレスを対象とした研究(Karraker, Lake, & Parry, 1994)、両親の離婚や近親者の死といった重大なライフイベントの経験の影響を検討した研究(Sandler & Block, 1979)、児童期以降の学校生活におけるストレスに関する研究(長根, 1991; 丹羽・山際, 1991; 岡安・嶋田・丹羽・森・矢富, 1992)はあるものの、幼児の園生活における日常的ストレスに焦点を当てたものは少ない。同年代の子どもと初めて共同

生活をする場である幼稚園や保育所において、幼児はどのようなストレスを経験しているのかを知ること、幼児の精神的健康、健全な発達を考える上で重要である。

幼児のストレスは、家庭生活と園生活の両方から考えることができる。家庭生活におけるストレスとしては、親からの叱責やきょうだいの喧嘩といったごく頻繁に起こる日常的な経験から、近親者の死や両親の離婚といったごく希で多大な心的疲労を伴うものまでである。この時期は、特に母子関係を中心とした家庭の持つ役割が大きく、家庭に問題を持つことが子どもの精神的健康や心身の発達に及ぼす影響は計り知れない。これは、先行研究が幼児の園生活におけるストレスに注目してこなかった理由の一つと考えられる。また、園生活におけるストレスは主に教師や友だちとの関係や園行事

- 1 広島大学教育学部
- 2 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
- 3 中央出版
- 4 秀和塾主宰

といった日常的なものであり、家庭において経験されるインパクトの大きいストレスに比べると、些細であると考えられがちである。しかし、近年ライフイベントのように経験する確率の少ないストレスよりも、日常的に経験している比較的些細なストレスの積み重ねの方が子どものストレス反応に深い関係があると言われてきている(嶋田,1997)。本研究においても、園生活でのストレスに絞って検討することで、幼児でも日常的な園生活でストレスを経験する子どもがいる可能性を検討することを目的とする。

一方、児童期以降の学校ストレスの研究が増加している理由として、現在の学校現場が抱える様々な問題の解決策が求められることが挙げられる。不登校者数は年々増加の一途を辿り、さらに若年化傾向を示している。また、学校におけるいじめ問題やそれを原因とする自殺は今や社会問題である。こうした背景のもと、学校における様々なストレスが、児童・生徒の精神的健康に与える影響を検討することが急務となっている。岡安ら(1992)は中学生の学校ストレスについて調査し、教師との関係、友人関係、部活動、学業といった4つの因子を得ている。また、丹羽・山際(1991)も児童・生徒における学校ストレスを小中高等学校の教師を対象に自由記述によって調査したところ、やはり友人関係や対教師関係、部活動といった項目が挙げられた。この結果からみて、児童期以降の学校におけるストレスとして対人関係が重要な位置を占めていることがわかる。

幼児における園生活でのストレスを考える手がかりの一つとして、都立教育研究所(1996)が行った、幼児のいじめ問題に関する報告がある。この調査によると、4-5歳児の60%がいじめられたことがあると答え、その時どうしましたかという問いに、5歳児では50%以上が泣いた、我慢したと答えている。このことは、幼児においても友人関係がストレスとなり得ることを示唆している。また、嘉数・井上・白石(1994)は幼児が幼稚園で経験すると思われる心理的ストレス場面を、幼稚園教諭を対象に調査したところ、対友人がいちばん多く、次いで対成人となっており、対人関係に関する出来事が幼児においてもストレスとして非常に重要な位置にあることを示している。さらに、対幼稚園(運動会、お遊戯会の練習)や対自分(自分の思い通りにならない、欲しいものが手に入らない)といったストレスも20%以上の割合で挙げられていた。そこで、本研究でも嘉数ら(1994)と同じく、まず予備的に保育者や保

護者を対象に自由記述方式のアンケートを行い園生活において幼児にとってストレスとして経験される出来事を収集し精選した後、さらに保育者に各項目について評定をしてもらい、因子分析によりストレス尺度項目を構成することを調査Iにおける目的とする。

次に、調査IIでは実際に幼児が日常の園生活でどの程度ストレスを経験しているかを幼児自身にたずね、幼児の園生活における実際のストレス状況を検討する。長根(1991)が、児童用の学校ストレス尺度の作成にあたり、日常よく経験する出来事に関する嫌悪性の評価のみであったのに対し、岡安ら(1992)は現実にはどのくらいの割合の児童がどのくらいの頻度で特定のストレスを経験しているかを測定するために、学校生活における出来事の実験頻度とその嫌悪性の程度に関する情報を得ることが必要であると指摘した。この指摘を受けて実験頻度と嫌悪性の評定値の積を算出しストレス度として使用している研究は多い(橋本,1995;川原,1994;小石,1997;1996;岡安ら,1992;嶋田・岡安・坂野,1992)。そこで本研究においても、調査Iで設定した各項目を幼児が実際にどの程度経験し、それがどの程度嫌悪刺激となっているかを調べることによって、各項目に対する幼児のストレス度を測定する。さらに、幼児においてもストレスに性差がみられるのか、因子得点に違いがみられるのかについても検討する。

ここで、本研究に関して園生活におけるストレスを考える際に留意したい点は、決して幼稚園や保育所が幼児にとってストレスに満ちた場所であるといった認識に立つものではないことである。ストレスとなる出来事の影響は、パーソナリティ特性や個人が経験した出来事、社会状況によって異なると言われている(Cobb,1974;Mechanic,1974)。つまり、同じ様な状況に遭遇しても皆が同じようにストレスを感じているわけではない。従って、相対的に幼児ストレスを感じやすい幼児が存在することが考えられる。こうしたストレス耐性が低い幼児がどういった特徴を持つかを考えるために、本研究では自己主張・自己抑制能力という観点からの検討を試みる。自己主張のできる幼児は、仲間との間にトラブルがあった場合に、はっきりと自分の意見を主張したりすることによってストレスを軽減することができるかもしれない。また、自己抑制能力の高さがストレスをコントロールできるという自信につながり、ストレスを軽減できる可能性や、自己抑制能力の低さがストレスに対する嫌悪性を高めストレスを高める可能性も考えられる。このことは、

Lazarus & Folkman(1984)がストレッサーに対する認知的評価とコーピングはストレス反応にいたるまでの個人差を説明する重要な要因であると述べたことにも関連するであろう。そこで、まず本研究においてはストレス度の高さと自己主張・自己抑制能力との関係について検討を加える。

### 予備調査

**目的** 幼児が幼稚園や保育所の日常生活場面においてどのような出来事にストレスを感じているのかを明らかにする。

**方法** 保育者や保護者を対象とした研修セミナーの参加者に、幼児が園生活でストレスを感じていると思われる出来事について自由記述方式のアンケートを配布し、セミナー終了後に回収した。

**結果** 質問意図に対して有効と思われる回答を選択した後、いくつかのカテゴリー（友だち、園行事、給食、遊びなど）に分類した。その中から代表的と思われる内容14項目を抽出した(TABLE 1)。

TABLE 1 幼児用ストレッサー項目

番号	項目内容
1	友だちとけんかする
2	友だちから命令される
3	友だちから仲間外れにされる
4	園行事で遊ぶ時間をとられる
5	園行事のため練習をしなければならない
6	給食で嫌いなものを食べなければならない
7	給食を食べてしまうまで遊べない
8	設定保育で好きな遊びができない
9	片づけを強要される
10	遊具などの数が足りず思う遊びができない
11	雨の日に思う遊びができない
12	先生に叱られる
13	先生に話を聞いてもらえない
14	絵や作品を思い通りに作れない

### 調査 I

**目的** 予備調査で得られた14項目について幼稚園の教諭、保育所の保育者に評定を依頼し、その評定値をもとに因子分析を行い幼児用のストレッサー尺度を構成する。

#### 方法

対象者：広島県内にある幼稚園8園、保育所5園に所属する保育者計111名であった。

手続き：予備調査で設定された14項目に関して、幼児がそれぞれの出来事に対してどれくらいストレスを感じていると思うかについて、5段階評定(1=全

TABLE 2 教師評定の平均値及び標準偏差

項目	平均値	SD	項目	平均値	SD
1	3.32	1.14	8	2.83	0.79
2	3.62	0.90	9	3.06	0.95
3	4.24	0.87	10	3.12	0.97
4	3.34	0.95	11	3.39	1.24
5	3.17	0.89	12	3.39	0.86
6	3.76	0.92	13	3.61	0.90
7	3.13	1.07	14	3.35	0.86

然なっていない～5=とてもなっている)してもらった。

#### 結果と考察

<因子分析による尺度構成> 14項目全てについて回答のあった102名分のデータを対象として項目の平均評定値と標準偏差を求めた結果をTABLE2に示した。

平均評定値をみると項目3が4.24と1番高く、項目2も3.62と3番目に高いことから、やはり友だちとの関係に関する項目が保育者から幼児のストレッサーとして高く評価されていることがわかる。また、項目13も項目2に次いで高いことから、友だちだけではなく対人関係が、ストレッサーとして高く評価されていることがわかる。これに対し、項目8の設定保育で好きな遊びができないことや片づけに関する項目9は比較的低い評定値であることから、対人関係比べると遊びに伴う園生活でのきまりに関する項目は、保育者からストレッサーとしてそれほど高く評価されていないようである。

次に、この18項目を対象に主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。固有値1以上であった4因子について、各因子に因子負荷量が.40以上の項目で、複数の因子に負荷の高かった項目12と14を除いた12項目を対象に因子名を想定した。因子1に含まれる項目をみると「片づけを強要される」「給食で嫌いなものを食べなければいけない」「設定保育で好きな遊びができない」など、保育者が意図的に幼児に要求している項目であると解釈し、“保育者の意図”と命名した。因子2は「友だちとけんかをする」「友だちから命令される」「友だちから仲間外れにされる」と3項目全てが友だちとの間の出来事であったため“友だち関係”と命名した。因子3は2項目とも園行事に関する項目であったため“園行事”と命名した。因子4「遊具などの数が足りず思う遊びができない」「雨の日に思う遊びができない」の2項目で“遊び”と命名した。因子各項目

TABLE 3 教師評定による各項目の因子パターン

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	$\alpha$ 係数
9	.66	.09	.24	.11	.67
6	.65	.26	.13	-.11	.72
7	.62	.06	.21	.02	.72
13	.54	.29	.15	.28	.74
8	.42	.00	.33	.31	.75
3	.34	.72	-.04	-.18	.58
2	.15	.62	.09	-.08	.47
1	-.08	.61	.05	.13	.67
4	.24	.14	.94	.01	.80
5	.30	.05	.77	.05	
11	-.08	-.03	-.04	.68	.28
10	.29	.04	.09	.45	
寄与率	.31	.13	.11	.08	

の因子負荷量と $\alpha$ 係数はTABLE 3に示した。

さらに、この4因子12項目について同一因子内の内的一貫性を調べるためにCronbachの $\alpha$ 係数を求めた。因子によって一貫性にばらつきがあり、因子1は.67～.75、因子3は.80と比較的高い値を得たものの、因子4に関しては.28とかなり低かったため、全ての因子に対して高い等質性が得られたとは言い難く、検討の余地を残してはいるものの、本研究においてはこの4因子12項目を採用し、調査Ⅱにおいてストレス項目として使用することとした。ただし、調査Ⅰにおいて得られた評定は、保育者の目から見た幼児の姿であるため、調査Ⅱにおいては幼児が実際にこれらの出来事をどの程度経験し、どの程度嫌悪刺激として受け取っているかを検討する。

## 調査Ⅱ

**目的** 調査Ⅰで得られた修正ストレス項目をもとに、幼児が実際にその出来事をどの程度経験しているかどの程度嫌悪刺激であったかを調べることによって、幼児のストレス度を調べ、さらにストレス度の高低と自己主張・自己抑制能力との関係を明らかにする。

### 方法

**対象者**：広島県内の公立保育所2園の年長児46名（男児26名、女児20名）であった。平均年齢は5歳10ヶ月、年齢範囲は5歳5ヶ月～6歳4ヶ月であった。  
**材料**：＜幼児用修正ストレス項目＞調査Ⅰで設定した12項目の内、項目7は調査園のスケジュール上ふさわしくないため除外し、4因子11項目から

TABLE 4 幼児用修正ストレス項目

因子番号	項目内容
保	1 片づけを強要される
育	2 給食で嫌いなものを食べなければならない
者	3 先生に話を聞いてもらえない
意	4 設定保育で思う遊びができない
の	
図	
友	5 友だちから仲間外れにされる
だ	6 友だちから命令される
ち	7 友だちとけんかする
行	8 園行事で遊ぶ時間をとられる
事	9 園行事のため練習をしなければならない
遊	10 遊具などの数が足りず思う遊びができない
び	11 雨の日に思う遊びができない

なる修正ストレス項目として使用した。内容はTABLE 4に示した。

＜評定用カード＞幼児に経験度と嫌悪度の評定をさせるために、大きさの異なる3つの円を台紙に添付したカードを使用した。

＜自己主張・自己抑制教師評定＞山崎・白石(1993)の自己主張・自己抑制の教師評定項目から自己主張は「明確な主張」の因子、自己抑制は「受容・抑制」と「持続・根気」の因子を抽出し、それぞれの評定項目として使用した（TABLE 5）。

**手続き**：＜ストレス調査＞調査は個別に面接方式で行った。まず幼児に11項目それぞれの出来事について今までに経験したことがあるかないか（経験度）をたずねた後、あると答えた幼児に対して、どれくらいあったかを評定用カードを用いてさらに3段階評定（0=全然ない～3=いっぱいある）させた。経験度を聞いた後、経験があると答えた幼児にのみ、その時どのくらい嫌だったか（嫌悪度）を同様に評定用カードを用いて評定（0=全然嫌じゃない～3=いっぱい嫌）させた。なお、各ストレス項目は幼児に分かりやすいよう平易な言葉にして説明した。項目の提示順序はランダムに行った。

＜自己主張・自己抑制教師評定＞TABLE 5の各評定項目について担任幼児全員を5段階評定してもらった。

### 結果と考察

経験度と嫌悪度の得点を掛け合わせたものを、その項目のストレス得点として以下の分析に使用した。経験度、嫌悪度それぞれ0～3点であるから、各項目の得点範囲は0～9点である。各項目の経験率（経験度1以上の回答をした幼児の割合）と嫌悪度平均値、ストレス得点平均値をTABLE 6に示した。

TABLE 5 自己主張・自己抑制に関する教師評定

因子名	項目内容
明確な主張	いやなことは、はっきりと言える 他の子どもと自分の意見が違っているとき臆せずに主張する 遊びたい玩具を友だちが使っている時貸してと言える ひどい悪口を言われたりからかわれると、怒る 入りたい遊びに自分から入れてと言える
受容・抑制	仲間と意見が違う時、相手の意見を入れられる 仲間と食い違った時は願望を抑えられる ブランコや滑り台を何人かの友だちと一緒に使える 悲しいこと、くやしいこと、つらいことなどの感情をすぐ爆発させずに抑えられる 遊びでルールを守れる 遊びの中で自分の順番が待てる
持続・根気	ちょっと失敗したりうまくいかないとすぐあきらめてしまう 少し難しいことをさせようとするのできないと言って後込みしてしまう 自分がしたいことを人にけなされるとしょげてしまう

経験率についてみると、過半数の幼児が経験している出来事が6項目、最も低い項目でも4割弱の幼児が経験していることから、幼児が日常的に経験しているという点では特に問題はなく、妥当な項目であったと思われる。嫌悪度については項目7が1番高く、幼児にとっても友だちとのトラブルが最も嫌な出来事であることがわかる。ストレス度をみても友だち関係因子の得点は比較的高く、小中学生を対象とした学校ストレスサーにおいても高く評価されていた(丹羽・山際, 1991; 岡安ら, 1992; 嶋田ら, 1992)友人関係が、幼児にとっても最もストレスを感じる出来事であることが示唆された。ストレス度

に関しては、経験度と嫌悪度を掛け合わせて算出しているため、経験率が高いほど高得点になりやすいが、項目9は経験率の高さに比べてストレス度が低いことから、項目8とともに園行事に関してはそれほどストレスとは感じていないようである。ただし、今回の調査では園行事を運動会に限定して幼児に質問した。園行事といっても様々な要素があり、園によってもその内容は異なるため、この点は慎重に考える必要があるかもしれない。また、項目10に関しては経験率、嫌悪度ともに高く、ストレス度が最も高かった。幼稚園教育指導書増補版(1989)の第1節にある“幼稚園の生活”の中では、適切な環境があることを唱い、「幼稚園においては、教育的な配慮の下に幼児が友だちとかかわって活動を展開するのに必要な遊具や素材、・・・などの様々な環境が用意されている。」と書かれている。また、保育所保育指針においても保育の環境として、「保育所の施設・屋外遊戯場は、子どもの活動を豊かにするにふさわしい広さを持ち、また、遊具・用具などが整えられ、それがじゅうぶん活用されるように配慮されなければならない。」とある。幼児にとっては、遊びが十分保障されるような環境にあることが重要であり、そうした環境がより豊かな体験を生む。環境に十分配慮することが幼児期の発達に即した保育を行うための出発点であるとも言えよう。項目10におけるストレス得点が高かったことは、幼児たちが保育環境の充足を求めている結果であろう。また、遊具の数が足りないという事態が、即友だちとのトラブルに発展

TABLE 6 各項目の経験率、嫌悪度、ストレス平均

因子	項目	経験率(%)	嫌悪度平均	ストレス平均
保 育 者 意 の 図	1	41.3	1.37 (1.04)	1.00 (1.98)
	2	45.7	1.03 (1.20)	1.34 (2.44)
	3	39.1	1.06 (1.08)	0.61 (1.32)
	4	54.3	0.92 (1.23)	1.24 (2.71)
友 だ ち	5	56.5	1.24 (1.17)	1.52 (2.32)
	6	37.0	1.07 (1.25)	1.09 (2.37)
	7	67.4	1.78 (1.64)	2.33 (2.94)
行 事	8	43.5	1.16 (1.48)	0.59 (1.27)
	9	95.7	0.62 (1.54)	1.02 (2.29)
遊 び	10	73.9	1.47 (1.06)	2.52 (3.05)
	11	69.6	0.94 (1.12)	1.15 (2.02)

( )内は標準偏差

TABLE 7 因子別平均ストレス得点

因子	男児(N=27)		女児(N=19)	
	平均値	S D	平均値	S D
保育者	1.11	1.37	0.99	1.40
友だち	1.83	2.05	1.39	1.72
園行事	0.54	1.06	1.18	1.57
遊び	1.80	2.28	1.71	1.83

することも考えられ、そのことがさらなるストレスにつながる可能性もある。しかし、遊具数の充足の必要性に関しては、常に全員に遊具が割り当てられることは、現実的に不可能であることや、数少ない遊具をみんなで順番に使うというルールを適用しそれを守れることも、幼児にとっては重要な発達課題であることから、ただ数を揃えることで幼児のストレス緩和を考えるべきではない。幼児の発達特徴も考慮に入れた上で、どのように幼児の保育環境を整備していくかという視点を持ちながら、幼児のストレスの緩和を考えていく必要があると思われる。

#### <ストレス因子得点>

各項目のストレス得点をもとに、男女別の平均因子得点を算出し(TABLE 7)、性別、因子間の得点の違いを検討するために、2(性別)×4(因子)の2要因分散分析を行った。因子の主効果が有意( $F(3,44)=3.49, p<.05$ )であったため、下位検定を行ったところ因子4の得点が因子3の得点より有意に高く、因子2の得点が因子3の得点よりも高い傾向にあった。その他の主効果及び交互作用はいずれも有意ではなかった。以上のことから、遊びに関するストレスや友だちに関するストレスは園行事に関するストレスよりも高いことが考えられる。先にも述べたように、幼児にとって遊びは園での生活の多くを占めるものであり、幼児にとっては生活の中心である。遊びに関わるストレスが他より高いことも頷ける。また友だち関係に関するストレスが高いことは、やはりこの時期からすでに友だちとのやりとりが子どもにとって重要な位置を占めていることを示している。友だちとの良好な関係が幼児に満足感を与えてくれる一方で、友だちとうまく関われないことは、幼児にとって非常にストレスフルであることがわかる。性差に関しては、いずれの因子においても有意な差はみられなかった。児童を対象とした先行研究においては、女子が男子に比べてストレス度が高いことを示している(長根,1991;岡安ら,1992)。しかし、これらの研究で性差のみられた因子あるいは項目を詳しくみていくと、いずれも学業に関連していた。遊び

を中心とした幼児の園生活では学業がストレス源とはなりえないことから、このような性差がみられなかったものと思われる。

#### <ストレス得点と自己主張・自己抑制得点>

幼児ごとに全ストレス項目の平均得点を算出し、幼児をストレス得点高群、中群、低群に分類した( $F(2,31)=108.9, p<.001$ )。さらに、各群の自己主張・自己抑制得点の平均値を算出したものをTABLE 8に示した。なお、自己主張・自己抑制に関する教師評定は1園のみで行ったため、以下の分析における対象児数は34名である。

TABLE 8 ストレス、自己主張・自己抑制平均

ストレス群	ストレス	自己主張	自己抑制
高群(N=9)	2.95(.62)	4.60(.42)	3.06(.64)
中群(N=11)	1.19(.36)	4.49(.39)	3.67(.40)
低群(N=14)	0.31(.20)	4.44(.65)	3.50(.58)

ストレス得点の高群、中群、低群の幼児の自己主張・自己抑制得点に違いがみられるかを検討するために、自己主張・自己抑制得点それぞれに、3つのストレス得点群による1要因分散分析を行ったところ、自己抑制得点において主効果に傾向がみられたのみであった( $F(2,31)=2.92, p<.10$ )。その結果、ストレス得点高群は中群に比べて自己抑制得点が低い傾向にあった。このことはストレス度の高い幼児がそうでない幼児よりも自己抑制能力が低い可能性があることを示唆している。しかし、この点に関しては統計的に有意な差ではないことや、ストレス度の高さと自己抑制能力の低さとの因果関係に言及できないため、自己抑制得点についても、高中低群に分類し、それぞれのストレス得点を算出した上で1要因分散分析を行ったが、いずれも有意な差はみられなかった。よって、ストレス度の高さと自己主張・自己抑制能力との関連について今後さらに検討する必要がある。嘉数ら(1994)は幼児の架空の対人的ストレス場面を設定し、その際のコーピング方略と自己主張・自己抑制能力との関連を検討しており、自己主張ができる幼児はサポート依頼ができることを示している。本研究では、コーピング方略やストレス反応については検討していないが、今後はこれらも合わせて検討していくことで、ストレス源の経験からストレス反応にいたるまでの経過をより明らかにでき、ストレス予防という観点からも有効なデータを提供することが可能であろう。

その際に有効なモデルがLazarus & Folkman(1984)

のストレスラーに対してどのようなコーピング方略を用いるかによって、ストレス反応の表出の個人差を説明できるというものである。ここで認知的評価とはストレスラーに対する嫌悪性の評価と、コントロール可能性の評価のことを言う。つまり個人によってストレスラーをどの程度嫌悪刺激と感じるか、あるいはストレスラーが自分にとってコントロール可能なものと感じるかによって、ストレスラーに対する対処方略が影響を受けるし、個人によってコーピング方略のレパトリーにも違いがある。認知的評価の段階でストレスラーに対する嫌悪性の評価が低ければ、特別なコーピング方略を使わなくてもすむであろうし、たとえ嫌悪性の評価が高くともコーピングに成功すればストレス反応として表出されずにすむのである。本研究で査定されたようなストレス度の高かったこどもが、実際にどのようなストレスラーに対処するのか、その対処方略によってストレス反応に違いがみられるのかどうかについて、このようなストレスモデルを参考に、今後は生起過程を含めて明らかにしていく研究が必要とされる。

## 引用文献

- Cobb, S. 1974 A model for life events and their consequence. In B. S. Dohrenwend & B. P. Dohrenwend (Eds.), *Stressful life events*. New York: Wiley.
- 橋本巖 1995 対人ストレスが心理的ストレス反応に及ぼす影響 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 551.
- 嘉数朝子・井上厚・白石敏行 1994 幼稚園における幼児の心理的ストレスおよび対処行動 琉球大学教育学部紀要, 45, 15-29
- Karraker, K. H., Lake, M. A., & Parry T. B. 1994 Infant coping with everyday stressful events. *Merrill-Palmer Quarterly*, 40, 171-189.
- 川原誠司 1994 子どものストレスとソーシャルサポート 日本発達心理学会 59 回大会発表論文集, 219.
- 小石寛文 1997 仲間関係への自己効力と仲間関係のストレスとの関連 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 79.
- 小石寛文 1996 学級における仲間関係ストレスの要因 日本心理学会第59回大会発表論文集, 408.
- 厚生省 1990 保育所保育指針
- Lazarus, R. S. & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer. (本明寛・春木豊・織田雅美(監訳) 1990 ストレスの心理学: 認知的評価と対処の研究 実務教育出版)
- Mechanic, D. 1974 Discussion of research programs on relations between stressful life events and episodes of physical illness. In B. S. Dohrenwend & B. P. Dohrenwend(Eds.), *Stressful life events*. New York: Wiley.
- 文部省 1989 幼稚園教育指導書増補版
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析—小学4,5,6年生を対象にして—教育心理学研究, 39, 182-185.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森俊夫・矢富直美 1992 中学生の学校ストレスラーの評価とストレス反応との関係 心理学研究, 63, 310-318.
- Sandler, I.N., & Block, M. 1979 Life stress and maladaptation of children. *American Journal of Community Psychology*, 7, 425-440.
- 嶋田洋徳 1997 子どものストレスとその評価 竹中晃二(編著) 子どものためのストレス・マネジメント教育—対症療法から予防措置への転換— 北大路書房
- 嶋田洋徳・岡安孝弘・坂野雄二 1992 児童における心理的學校ストレス尺度の開発 日本行動療法学会第18回発表論文集, 28-29.
- 都立教育研究所(幼児教育研究部) 1996「いじめ問題」を考える—幼児期に焦点を当てて—「いじめ問題」研究報告資料
- 山崎晃・白石敏行 1993 幼児の自己実現を自己主張と自己抑制からとらえる 保育学研究, 31, 104-112.

## 謝 辞

調査にあたり協力して下さった東広島市立高屋東保育所、御園宇保育所の園児のみなさん、先生方、評定にご協力いただいた広島市、東広島市内の幼稚園、保育所の先生方に心よりお礼申し上げます。また、本論文の作成にあたりご指導いただきました、広島大学教育学部教授山崎晃先生に心より感謝いたします。